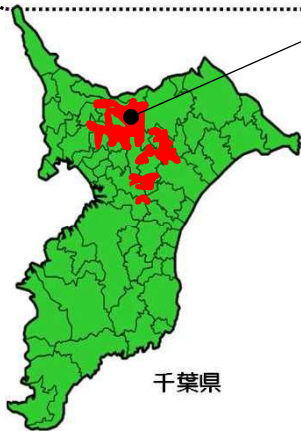


国営かんがい排水事業北総中央地区が完了

国営かんがい排水事業北総中央地区が令和2年度で完了を迎えました。安定的な農業用水の補給と地下水からの水源転換を行い、農業経営の安定化と近代化を図りました。併せて、地域内の農業用水が従来から有していた防火用水機能の維持・増進も図りました。



千葉県

国営かんがい排水事業「北総中央地区」昭和63年度～令和2年度

関係市町：千葉県千葉市、成田市、佐倉市、東金市、八街市、富里市、山武市

受益面積：3,267ha

概要：千葉県北部に広がる畑地帯や小河川に介在している水田地帯に対し、安定的な農業用水の供給を図るため、北総東部用水に設けた2箇所の取水口から農業用水を取水し、送水路（約22km）、揚水機場（2箇所）、幹線用水路（約27km）、支線用水路（約20km）、末端用水路（約78km）、調整水槽（19箇所）等を建設し、地区内の農地へ送水。



北総台地の農業開発の歴史

千葉県の北部一帯に広がる北総台地は、現在では、千葉県有数の農業地帯となっていますが、水に恵まれない台地で、中世まではほとんど手つかずの状態でした。

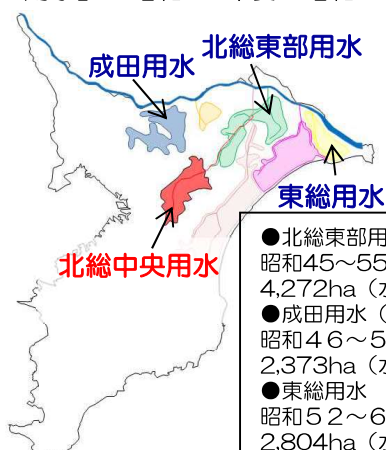
江戸時代には農地となったのは一部で、台地のほとんどは「牧（馬を放し飼いにする牧場）」として使われました。

明治の初め、職を失った武士の救済と食糧増産のため、明治政府が開拓の対象とした一つが北総台地の牧でしたが、手つかずだった土は固く、開拓者の離散・逃亡が後を絶たなかったと言われています。

昭和30年頃から、肥料や栽培方法の改良が進んだこともあり、北総台地の農業は水に恵まれない台地に合わせた生産を中心としていた時代から、すいか、にんじん、白菜など野菜栽培等による売上げ増を図る時代へと移り変わっていきましたが、雨水に頼った農法では限界があったため、この頃から井戸ポンプで地下水をくみ上げ、畑へと水を配る畑地かんがいのはじまりました。

その後、野菜の生産を拡大し、首都圏の食糧供給基地となった北総台地ですが、地下水のくみ上げが地盤沈下の要因の一つとなり、「利根川の水を畑のかんがい用水に」という声が高まる中、昭和37年4月に利根川水系が水資源開発水系に指定されたことにより、安定した水源を利根川に求める大規模用水開発が行われ、北総台地の畑地帯では、北総三大用水と呼ばれる「北総東部用水」「成田用水」「東総用水」が昭和45年度～昭和63年度に相次いで着工

・完成し、安定した農業が可能となり、昭和63年に、北総東部用水から取水する「北総中央用水」が着工となりました。



- 北総東部用水
昭和45～55年度
4,272ha（水田2,228ha、畑2,044ha）
- 成田用水（芝山町含む）
昭和46～55年度
2,373ha（水田1,841ha、畑532ha）
- 東総用水
昭和52～63年度
2,804ha（水田500ha、畑2,304ha）

地域への貢献(地域用水機能の維持・増進)

昭和30年代後半から整備された既設畑かん地区の農業用水の一部は、地域の防火用水として利用されており、地域用水機能を有していました。

本事業では、平成16年度に「地域用水環境整備計画」をとりまとめ、新設又は更新した農業用パイプライン施設を利用した防火用水機能の維持・増進を図りました。



農業用水を活用した消防訓練

安定した農業経営

本地区では、畑作は露地野菜を中心とした都市近郊の特徴を生かした経営、水田は一部転換畑利用を行い、野菜類を組み合わせた複合経営が指向されています。

利根川からの導水により、安定的な用水補給と地下水からの水源転換を行うことで、干ばつ時にも安定して農業用水を使用できるようになりました。

豊富な農業用水は、農作物の収穫量の増加や品質の向上に効果を発揮するだけでなく、ハウス栽培への利用など様々な農作物を安定して作ることが可能となりました。



落花生へのかん水



ショウガへのかん水